

功利主義は進化論的暴露から逃れられない

太田紘史(Koji Ota)・笠木雅史(Masashi Kasaki)

新潟大学・名古屋大学

これまで、道徳性の進化的起源に関する説明から倫理的含意を取り出す試みがいくつかなされてきた。そうした試みのうち、特定の倫理学理論の正当性を失わせる論証は、進化論的暴露論証と呼ばれる。とりわけ特定の規範倫理学理論を標的とした進化論的暴露論証としては、Singer(2005)や Greene(2008, 2014)によるものが有名である。彼らによれば、義務論的な理論（とりわけカント流のそれ）は、人間が持つ特定の心理傾向に対するポストホックな合理化であり、またそこで合理化される心理傾向は進化論的説明を受けるため、当該の理論は正当性を失う。他方、彼らによれば、こうした進化論的暴露は、対抗的な規範倫理学理論である功利主義には当てはまらない。

こうした義務論に対する進化論的暴露が成功するかどうかについて、これまで多くの議論が行われてきた。今回我々はこの係争点に入り込まない。我々はむしろ、義務論に対する進化論的暴露論証と構造的に同一の論証が、功利主義に対しても構築可能だと論じるつもりである。同様の試みはこれまで少数ながら存在したが、それは功利主義が前提とする快の善さや苦しみの悪さというテーマに対する進化論的暴露を試みるものであった(Kahane 2014)。しかし、こうした従来の試みに対して功利主義の擁護者が反論するところによれば、そうした暴露論証は、功利主義において固有かつ中心的な原理である不偏性——あるいは「普遍的慈愛の原理」——を標的とするわけではない(Lazari-Radek & Singer 2012)。功利主義の擁護者らが強調するところによれば、まさに不偏性の原理が明確に進化的説明の試みと対立するものであり、功利主義はその限りにおいて進化論的暴露から逃れることができる。

我々が今回主張するのは、この原理に焦点を合わせても、やはり功利主義は進化論的暴露から逃れられないということである。そう論じるうえで我々は、ポストホックな合理化というアイデアが義務論に対する進化論的暴露において果たす役割について再考するつもりである。我々の診断では、功利主義に進化論的暴露が当てはまらないという Singer、Greene、Lazari-Radek の考えは、進化的暴露が正確にはどのような論証構造を持つものかについての不十分な理解に由来する錯誤である。